

質問紙調査に見る乳幼児の感性を育む環境

—子どもと自然環境を中心に—

大橋 喜美子*

A natural environment to foster sensibility of infants defined through a questionnaire survey : Focusing on Children and the Natural Environment

Recent reports have suggested that experiences of children in a natural environment foster self-esteem and other noncognitive skills in their growth process. In this study, we examined development of sensibility in children through a process involving awareness, surprise, wonder and an inquisitive mind during play in a natural environment. This process was based on theoretical and practical childcare, with the hypothesis that children would be willingly involved in nature.

We suggest that in an environment that fosters sensibility, such intellectual activities are repeated with a change of seasons, various experiences of nature, and the feelings of children about nature.

The importance of the natural environment for children has been discussed in practical research based on actual experiences of observers and from a standpoint of psychology. In this study, we examine this natural environment, with which children were familiar and in which they could play freely, based on the words of the children that made the greatest impression on their Nursery teacher. The results of a questionnaire survey revealed the natural environment that is ideal for children for discovery, excitement, and development of an inquisitive mind, as well as for fostering sensibility.

I. 問題の所在

保育所保育指針（以下、保育指針と述べる）や幼稚園教育要領（以下、教育要領と述べる）、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、教育・保育要領と述べる）では、保育の基本のひとつとして環境を挙げている。本研究では、保育指針や教育要領、教育・保育要領の保育内容「環境」領域にある「子ども自らが環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んでいくことができるよう配慮すること。」「子どもが人と関わる力を育てていくため、子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくことができる環境を整えること。」に注目した。国の保育の基本として存在する保育

指針や教育要領、教育・保育要領ではあるが、その解釈は様々であり、子どもが自ら関わる環境というよりは、算数や国語のテキストに沿った保育などの環境で、子どもの心の響きや想いが先行されることなく、子ども自身が自分の意見や考えを伝えにくい雰囲気の中で大人の意志に添うことが素直で良い子どもと評されることもある。

また、近年では少子化が進み、ITの発達と共に子どもの遊びは、大きく変化してきた。そこには、子どもが身近な環境と関り、探求心をもって不思議に思ったり考えたりする感性が育つのだろうかとする疑問が残る。

本研究では、自然に触れる環境を通した保育が、子どもの感性の育ちにつながると考えて、園外（散歩&散歩先を指す。以下、同様である。）での遊びと園庭（保育園の庭やグラウンドを指す。以

* 大阪総合保育大学

下、同様である。)での遊びにおける子どもが好きな遊び、及び園外遊びによる子どもの気づきとの関連から、子どもの感性を育くむ保育の環境に着目した。

Ⅱ. 先行研究による検討

保育指針及び教育要領、教育・保育要領(2018)では、「就学までに育みたい資質・能力及び幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」に感性が出てくる。「(10) 豊かな表現と感性：心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲を持つようになる」である。ここでは、感性の定義が明確にされていない。塚本・廣田ら(2020)の実践研究では、保育指針や教育要領、教育・保育要領の10の姿と関連させながら、5歳児の造形表現に着目している。そこでは「豊かな感性と表現」から「心を動かし楽しく表現する幼児」に注目して、その要因を分析している。こうした感性に関する研究では、音楽や絵画制作などの表現領域で一般的な用語として使用されていることが多い。改めての定義はないが、実践研究には、人を対象とした多様な質と量が研究の原点として存在すると考えられ、そこに感性の語義について意義を見出すことができると考えられる。

難波(2020)は、教育要領の「表現」に着目して、感性とは「理性的認識は能動的であるが、感性的認識は受動的である」とする考えを述べている。その上で、「とくに情操の働きを促す感性は、けっして単なる感覚ではない。『価値あるものに気づく感覚』であり、主体の方が『気づく』という点で、若干は能動的なものにしておこう」と述べている。また、無籐によれば、感性の育ちは、子ども主体の「自分なりの表現と意味の発見ができる」と述べている(1998)。そして、さらに無籐(2016)は、保育指針や教育要領、教育・保育要領における「学びに向かう力や姿勢」は非認知

能力として表現できると述べている。一方で、感性の育ちについては、気づきと関連させながら「おそらく」と前置きをしながら、「子どものまわりの身近な世界にさまざまな対象が存在して生きていることを感じとり…中略…子どもがまわりの事物に開かれていくこと」であり、「身近な環境における事物に対する気づきとは、感性に映じたもの」そして、それらをさらに発展させたものとして、「独自の一面に焦点化することで生まれる」としている。平嶋(2020)は、「感性(教育)」こそが「人間性回帰の原点になり得る」とし、「感性」とは、端的に言い換えるとすれば「気づき」であると述べている。

本稿では、『感性』とは『子どもの気づき』から始まるとして、豊かな気づきが発せられる望ましい環境について検討する。

Ⅲ. 目的

子どもが自ら関わろうとする環境は、自然を対象とすることが多く、その経験が繰り返されることにより、感性が豊かになると考えられる。そのため、本研究では園庭と園外の遊びにおける子どもの気づきについて検討する。また、自然への気づきは、園外遊びでの経験回数と関連があるのではないかと考え、園外遊びの有無と子どもの気づきの対象や内容について明らかにすることを目的とする。

Ⅳ. 手続きと方法

1. 実施時期：2020年2月10日から2月19日

2. 質問紙対象者：

対象はA県B市の公私立の現職保育者143名である。質問紙実施にあたっては、各施設の施設長より協力保育者を紹介され、e-mailで一斉に依頼した。質問紙はA4判2ページで構成されている。施設長を通しての紹介であったため、配布数と回答者数は同様である(143名)(表1)(表2)。施設長及び回答者である保育者の承諾は文書で得た。

表1. 回答者の年齢

年齢	2020年度(N)
20歳以上25歳未満	17
25歳以上30歳未満	29
30歳以上35歳未満	34
35歳以上40歳未満	17
40歳以上45歳未満	19
45歳以上50歳未満	10
50歳以上55歳未満	6
55歳以上60歳未満	6
60歳以上	5
合計	143

表2. 回答者の経験年数

総経験年数	2020年度
1年未満	4
1年以上3年未満	5
3年以上5年未満	21
5年以上10年未満	36
10年以上15年未満	32
15年以上20年未満	21
20年以上30年未満	19
30年以上40年未満	3
40年以上	2
合計	143

しかし、施設側の方針により、連名で承諾書記載を希望された場合は、先方の指示に従った。

3. 質問紙調査作成について

質問紙調査作成では、家庭教育研究No.25pp23-33(大橋2020)に依拠すると共に本質問紙における回答者の内容を総合的に配慮した。なお、「家庭教育研究No.25」の質問紙作成は、学びのプラン(大野2010)、筆者らが実施した「保育者と養育者の質問紙調査(2014)」を参考とし、研究者1名の協力を得て作成した。

4. 研究対象の質問項目

本研究では、質問紙調査の内容(表3)のうち、「2. 保育園の環境について」と「3. 子どもが発見や不思議さに気づく場面についてご自身の経験から2つ程度記述してください。」を研究の対象とした(表4)(表5)。

5. 分析方法

(1) 園庭遊びと園外遊びにおける子どもが好む遊びの比較検討

園庭遊びと園外遊びについて単純集計を行い、

表3. 質問紙調査の内容

<p>1. ご自身のお立場について教えてください。</p> <p>(1)あなたは ()女性 ()男性</p> <p>(2)あなたの年齢は ()歳</p> <p>(3)現在の勤務形態は ()正規職員 ()非正規職員 ()パート職員</p> <p>(4)現在、勤務されておられる所属機関についてご記入ください。</p> <p>()保育所(園) ()幼稚園 ()認定こども園</p> <p>(5)保育者(教諭・保育士・保育教諭)としての総経験年数についてご記入ください</p> <p>(6)保育の仕事のご経験は：①現在の職場()年、②現在の職場以前()年、合計()年</p> <p>(7)現在ご担当されている子どもさんの年齢についてご記入ください。</p> <p>2. 保育園の環境について(表4)</p> <p>3. 子どもが発見や不思議さに気づく場面についてご自身の経験から2つ程度記述してください(表5)</p> <p>4. 上記2つの事例は次の保育につなげましたか?</p> <p>5. 保育をする上で保育者として人としての率直な気持ちを教えてください。</p> <p>6. 保育所(園)、認定こども園における教育の質とは何か、あなたのお考えをできるだけ具体的にお聞かせください。</p> <p>7. その他、何でも日頃感じたり考えたりしていることを自由にお書き下さい。</p>
--

表4. 保育園の環境について

2. 保育所(園)の環境について(カッコ内に○印を)

(1)歩いて行ける場所に自然がある場合
出かける回数は? ()毎日、()週に 回数、()月概ね 回数、時間帯は(時 分～ 時 分頃)
どのようなあそびをしていますか?下記に書いて下さい。

[]

(2)歩いて行ける場所に自然がない()

【理由:]

(3)園庭に自然がある()

①園庭での遊びは?……概ね 毎日()、週に()回数、時間帯は(時 分～ 時 分頃)
どのようなあそびをしていますか?具体的に書いて下さい。

[]

表5. 子どもが発見や不思議さに気づく場面

3. 子どもが発見や不思議さに気づく場面についてご自身の経験から記述してください。ない時は「なし」と記述。

①紙面不足時は裏面に	子どもの言葉	保育者(教師)の対応 (言葉かけ・保育者の対応など)	保育場面 (場所など)
感動した言葉・つぶやき(時系列で子どもと先生とのやりとりを書いて下さい)			
いつ(該当箇所を○で囲んで下さい)	午前の自由遊び、 午前の設定保育 午後の設定保育、 午後の自由遊び、 その他⇒具体的に書いて下さい()		

その後 js-STARversion 9.7.2j による直接確率計算(正確二項検定)の両側検定により仮説検証を行い、子どもが好む遊びと、その環境について明らかにした。

(2) 4項目(子どもの気づき)と園外遊び回数に関する検討(表6)

保育者からの自由記述による子どもの気づきの内容は、園外遊びの実施回数と関連があると推測された。そこで、保育者から得た回答と先行研究(大橋2020)に基づき、抽出した記述を項目1から項目4に分類した(表6)。項目1は「気づき/自然/不思議」、項目2は「気づき/生き物/感動」、項目3は「育てる/育つ/栽培」、項目4は「子/集団/保育者/感動」とした。その後、4項目と園外遊び有無の比較及び4項目に見る年齢群の傾向と園外遊び実施有無の関連について、

js-STAR×R+release 1.60j による直接確率計算(正確二項検定)の両側検定により仮説検証を行った。

なお、回答者数が異なる為、年齢毎に比率を算出した。数字は小数点以下四捨五入を原則としているが、合算時に差異が生じることがある。その際は、数が少ない方を切り捨てたり、多い方を繰り上げたりしている。

6. 用語の表記(子ども・年齢)について

本稿で述べる子どもとは0歳児から就学前の5歳児までを指している。児童福祉法や母子保健法では、1歳に満たない者を乳児とし、1歳から、小学校就学の始期に達するまでの者を幼児としているが、本論では、0歳児から5歳児を子どもと表記する。文脈によっては、0歳児から5歳児までを乳幼児と表記することがある。また「〇〇歳

表6. 気づきの分類としての4項目の内容

<p>項目 1. 気づき/自然/不思議</p> <p>自然とは、辞書の多くは「人為的に手を加えられていないもの」との記述がある。ここでは、子どもの身近な環境としての、空や水、天候に関わる雲や雨や雪への想いや感動、不思議に思う気持ちなどの全てを指している。</p> <p>項目 2. 気づき/生き物/感動</p> <p>子どもにとって身近な生き物である蛙やカマキリ、オタマジャクシ、鳥、蝶々などに触れあう体験での感動や、散歩先で見つけた生物への感動を指す。本項目では、虫を飼育する中で見つけた感動なども含まれ、人為的な保育とも関連している。</p> <p>項目 3. 育てる/育つ/栽培</p> <p>遊んでいて目に入った植物などへの子どもの気づきや驚き、花壇や畑など土と触れ合う中での発見や探求心、育てることへの喜びや驚きなど人為的である場合も含まれる。</p> <p>項目 4. 子/集団/保育者/感動</p> <p>日々の保育場面において、保育者が子どもの発達に感動した事例や、集団の中で見つけた子ども間での共感や優しさ、感動などが含まれる。</p>

児」とは、4月2日から翌年4月1日までの、学校教育法による年齢を指している。「▽▽歳」の表記は実年齢であるとした。

なお、法律による表記及び先行研究等における表記については原文の通りとした。質問紙調査における保育者の記述も原文のままとした。

7. 研究実施における倫理的配慮

対象者には、事前に文書で研究目的、研究方法、質問紙調査内容、プライバシーの保護及び調査前後においても拒否することができる旨を伝えた。

本研究の研究実施計画については、大阪成蹊大学「人を対象とする研究倫理審査委員会」の承認を得た。

V. 結果と考察

1. 園庭と園外での子どもが好む遊びと環境

(1) 園外遊びでの内容 (表7)

園外遊びの保育では、該当する記述が多い順に0歳児は上位9位、1歳児から5歳児は上位10位まで抽出した。その他は全ての年齢においていずれも1名だった。その内容は表7に示す通りである。

表7. 園外遊びでの内容

園外遊び (0歳児)		園外遊び (1歳児)		園外遊び (2歳児)		園外遊び (3歳児)		園外遊び (4歳児)		園外遊び (5歳児)	
内容	人数	内容	人数	内容	人数	内容	人数	内容	人数	内容	人数
自然	9	虫や生き物に触	16	草花	11	木の葉落ち葉拾い	18	鬼ごっこ	4	自然物	4
散歩	4	散歩	6	かけっこ	11	草花	17	木の葉落ち葉拾い	9	木の葉落ち葉拾い	14
広場	2	木の葉落ち葉拾い	6	木の葉落ち葉拾い	8	虫や生き物に触れる	9	土手遊び	6	土手遊び	9
木の葉落ち葉拾い	2	自然散策	4	散歩	6	土手遊び	7	虫や生き物に触れる	5	木枝	6
草花	2	土手遊び	4	土手遊び	5	公園	5	あぜ道	4	散歩	5
探索	2	草花	4	虫や生き物に触	5	自然散策	3	落ち葉	3	草花	5
魚っば	1	自然	3	広場	3	かけっこ	3	散歩	3	鬼ごっこ	5
石	1	落ち葉	3	自然物	2	自然物	3	草花	3	地域探検・田んぼ	4
生き物探し	1	走る	3	公園	2	散歩	3	木の枝	3	落ち葉	3
その他	0	草むら	1	あぜ道	2	あぜ道	1	自然物	2	氷遊び	2
		その他	10	その他	23	その他	24	その他	16	その他	16

る。1歳児では「階段」「公民館」など、2歳児では「しっぽとり」「校庭」「斜面」「段ボール」「寺」など、3歳児では、「神社」「電車を見に行く」「季節」など、4歳児では「地域の人との交流」「水路」「山登り」など、5歳児は「丘」「上野城」「バーベキュー」「凧あげ」などだった。網掛け部分は、自然と関わるとされる遊びの内容である。園外遊びにおいて、0歳児から5歳児までの自然に関わる遊びと自然に関わらないと考えられる遊びでは、全ての年齢において、自然に関わる遊びが自然に関わらない遊びより有意だった ($p < .01$)。

結果、園外遊びでは、自然を対象とする遊びが有意であった。

(2) 園庭に自然があるとされた遊び (表8)

園庭における遊びは、該当する記述が多い順に0歳児から2歳児は上位11位まで、3歳児から5歳児は上位12位までを示した。「その他」は、0歳児はゼロであった。1歳児から5歳児までの年齢においては1名だった。1歳児は「手押し車」「ロンパーカ」「遊具」、2歳児は「サーキット」「小石集め」「かくれんぼ」、3歳児は「ダンパーカー」「段ボール」「あぶくたつたにえたつた」、4

歳児は「スライダー」「ジャンプ」「リレー」、5歳児は「サーキット」「マラソン」「築山」だった。なお、遊びの内容では、類義語と考えられる言葉(例えば「葉っぱと葉」は「草花」、「かけっこ走り」は「かけっこ」として)、そして「鉄棒やブランコ、ジャングルジム、上り棒」などは「固定遊具」として合算した。

園庭遊びにおいて、0歳児から5歳児までの子どもでは、自然に関わる遊びと自然に関わらないと考えられる遊び(その他を除いた網掛けがない箇所)では、全ての年齢において、自然に関わる遊びより自然に関わらないと考えられる遊びが有意だった ($p < .01$)。結果、園庭では、自然を対象とする遊びは少なく、ごっこ遊びや固定遊具などでの遊びが有意であった。

2. 4項目(子どもの気づき)と園外遊び回数の関連

回答は複数回答可であった為、分析対象数は179である。

(1) 園外遊びの回数が有と無の比較 (表9)

園外遊びの回数は、全く実施していない場合は「無」とし、「無」以外は回数に関係なく経験をし

表8. 園庭における遊びの内容

園庭 (0歳児)		園庭 (1歳児)		園庭 (2歳児)		園庭 (3歳児)		園庭 (4歳児)		園庭 (5歳児)	
あそび	人数	あそび	人数	あそび	人数	あそび	人数	あそび	人数	あそび	人数
草花	13	固定遊具	9	固定遊具	32	固定遊具	20	砂遊び	17	鬼ごっこ	13
固定遊具	10	築山	5	かけっこ	20	鬼ごっこ	17	鬼ごっこ	13	固定遊具	11
砂遊び	9	ボール	5	ボール	13	砂遊び	15	固定遊具	12	縄跳び	8
網掛け遊具	6	かけっこ	5	砂遊び	13	草花	13	ボール	7	草花	7
ボール	6	砂遊び	4	フープ	9	ボール	8	縄跳び	5	サッカー	7
車	5	網掛け遊具	4	ブランコ	7	だるまさんが転んだ	8	だるまさんが転んだ	4	ドッチボール	5
築山	3	フラフープ	2	網掛け遊具:木の葉	7	三輪車	6	サッカー	4	ごっこ遊び	4
芝生	2	玉入れ	1	三輪車	6	車	6	かくれんぼ	4	リレー	3
三輪車	1	ままごと	1	タイヤ	2	フープ	6	フープ	3	氷探し	2
太鼓橋	1	三輪車	1	どろんこ	1	かくれんぼ	5	氷探し	3	だるまさんが転んだ	2
外遊び	1	虫探し	1	小石集め	1	かけっこ	5	氷探し	2	大縄跳び	1
その他	0	その他	6	その他	34	虫探し	1	草花	1	虫探し	1
						その他	44	その他	16	その他	33

表9. 園外遊び（散歩）の実施有無の人数（カッコ内は単位：％）

年齢 有無	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	合計
有	11(52)	16(73)	28(82)	36(88)	20(74)	31(91)	144
無	10(48)	6(27)	6(18)	5(12)	7(26)	3(9)	35

ていれば「有」とした（表9）。

園外遊び有では、4歳児を除くと、年齢が高くなると実施の回数（比率）が増加している。

一方、園外遊び無では、4歳児を除くと、年齢が低くなると園外遊びの回数（比率）が減っている。以上の園外遊びの有無は、0歳児は、散歩回数有無間において有意差は見られなかった。1歳児から5歳児は園外遊び有無間において「有」が「無」より有意に多かった（ $p<.01$ ）。

（2）4項目に見る年齢別の傾向と園外遊び実施有無の関連（表10）

項目1. 気づき／自然／不思議について

0歳児は園外遊び有（以下、有と示す）は33%（7名）、園外遊び無（以下、無と示す）は、10%（2名）で、「有」と「無」間において「有」が有意だった（ $p<.005$ ）。1歳児有は23%（5名）、無は10%（2名）で有意差は見られなかった。2歳児は、有が35%（12名）、無は9%（3名）で、「有」と「無」間において「有」が有意だった（ $p<.005$ ）。3歳児は有が54%（22名）、無はゼロで、「有」と「無」間において「有」が有意だった（ $p<.005$ ）。4歳児は有が30%（8名）、無が11%（3名）で、「有」と「無」間において「有」が有意だった（ $p<.005$ ）。5歳児は有が32%（11名）で、無はゼロで、「有」と「無」間において「有」が有意だった（ $p<.005$ ）。

項目2. 気づき／生き物／感動について

0歳児は「有」「無」共に回答はゼロ、1歳児は14%（3名）有で、無はゼロで「有」と「無」間において「有」が有意だった（ $p<.005$ ）。

2歳児は15%（5名）有で無はゼロで「有」と「無」間において「有」が有意だった（ $p<.005$ ）。3歳児は有が2.5%（1名）、無が2.5%（1名）で、有意差は見られなかった。4歳児は有が18%（5名）、無は4%（1名）で、「有」と「無」間において「有」が有意だった（ $p<.005$ ）。5歳児は有9%（3名）、無3%（1名）で有意差は見られなかった。

項目3. 育てる／育つ／栽培について

0歳児は有無共にゼロ、1歳児は有が5%（1名）で無はゼロで有意差はなかった。2歳児は有12%（4名）で無はゼロで、「有」と「無」間において「有」が有意だった（ $p<.005$ ）。3歳児は有7%（3名）、無はゼロで「有」が有意だった（ $p<.025$ ）。4歳児は有が15%（3名）、無は7%（2名）で有意差はなかった。5歳児は有が15%（5名）、無はゼロで「有」と「無」間において「有」が有意だった（ $p<.005$ ）。

項目4. 子／集団／保育者／感動について

0歳児は有が19%（4名）、無が38%（8名）で、無に有意差が見られた（ $p<.025$ ）。1歳児は有32%（7名）、無18%（4名）で「有」「無」間において有意差はなかった。2歳児は有が20%（7名）、無9%（3名）で、「有」「無」間において有意差は見られなかった。3歳児は有24%（10名）、無10%（4名）「有」「無」間において「有」が有意だった（ $p<.025$ ）。4歳児は有11%（3名）、無4%（1名）で有意差は見られなかった。5歳児は有32%（12名）、無6%（2名）で、「有」「無」間において「有」が有意だった（ $p<.005$ ）。

表10. 4項目と園外遊び回数との関連(人数)

年齢群	園外遊び回数	気づき/自然/不思議	気づき/生き物/感動	育てる/育つ/栽培	子/集団/保育者/感動	合計
0歳児	1週に4回有	0	0	0	0	0
	1週に3回有	0	0	0	0	0
	1週に2回有	0	0	0	0	0
	1週に1回有	3	0	0	1	4
	1か月に1回有	0	0	0	0	0
	不定期に有	4	0	0	3	7
	無	2	0	0	8	10
	0歳児 小計	9	0	0	12	21
1歳児	1週に4回有	1	0	0	1	2
	1週に3回有	0	1	0	1	2
	1週に2回有	1	1	0	2	4
	1週に1回有	1	1	1	0	3
	2週に1回有	2	0	0	0	2
	1か月に1回有	0	0	0	0	0
	不定期に有	0	0	0	3	3
	無	2	0	0	4	6
1歳児 小計	7	3	1	11	22	
2歳児	1週に4回有	0	0	0	0	0
	1週に3回有	0	0	0	0	0
	1週に2回有	1	2	0	0	3
	1週に1回有	4	1	2	3	10
	2週に1回有	0	0	0	0	0
	1か月に1回有	0	0	0	1	1
	不定期に有	7	2	2	3	14
	無	3	0	0	3	6
2歳児 小計	15	5	4	10	34	
3歳児	1週に4回有	0	0	0	0	0
	1週に3回有	0	0	0	0	0
	1週に2回有	3	0	1	0	4
	1週に1回有	8	0	1	0	9
	1か月に1回有	2	0	0	2	4
	不定期に有	9	1	1	8	19
	無	0	1	0	4	5
	3歳児 小計	22	2	3	14	41
4歳児	1週に4回有	0	0	0	0	0
	1週に3回有	1	0	0	0	1
	1週に2回有	1	2	0	0	3
	1週に1回有	6	1	3	2	12
	1か月に1回有	0	0	0	0	0
	不定期に有	0	2	1	1	4
	無	3	1	2	1	7
	4歳児 小計	11	6	6	4	27
5歳児	1週に4回有	0	0	0	0	0
	1週に3回有	0	0	0	0	0
	1週に2回有	3	3	2	1	9
	1週に1回有	5	0	0	5	10
	2週に1回有	0	0	0	0	2
	1か月に1回有	0	0	0	2	2
	不定期に有	3	0	3	4	10
	無	0	1	0	2	3
5歳児 小計	11	4	5	14	34	
総計		85	20	14	60	179

(3) 園外遊び「有」の事例から見る4項目と年齢における検討

ここでは、園外遊び「有」の回答に基づき、4項目と園外遊び回数における事例から気づきの場面とその内容について年齢毎に検討を行う。

0歳児について (図1)

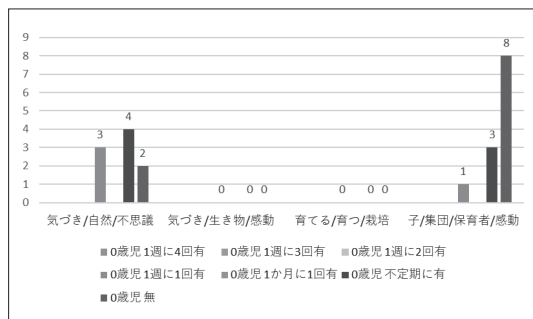


図1. 0歳児の気づきと園外遊びの回数

0歳児の項目1 気づき／自然／不思議における事例は9事例だった。項目2の「気づき／生き物／感動」と項目3の「育てる／育つ／栽培」では、回答がなかった。項目4の「子／集団／保育者／感動」は12例だった。0歳児の気づきの内容は、テラスを含む保育室での気づきであり、0歳児の遊び環境は生活場面が中心であることがうかがえた。

1歳児について (図2)

1歳児の気づきの内容は、項目1の気づき／自然／不思議は7事例、項目2の気づき／生き物／感動は3事例、項目3の育てる／育つ／栽培は1事例、項目4の子／集団／保育者／感動は11事例だった。気づきの場は、園外遊びが3事例、園庭が3事例、保育室は14事例、菜園が2事例だった。週4回園外遊び有のA児は、散歩途中で落ち葉を踏みしめる音に気づき『「うわーいっぱいおとなする」「音した」「どこ」「一緒や』』とする会話が記述されていた。週2回園外遊び経験有は2事例だった。B児は『どんぐりの木の下を通ると「これなにー?」「見て、ちっちゃーい。」「わーいっ

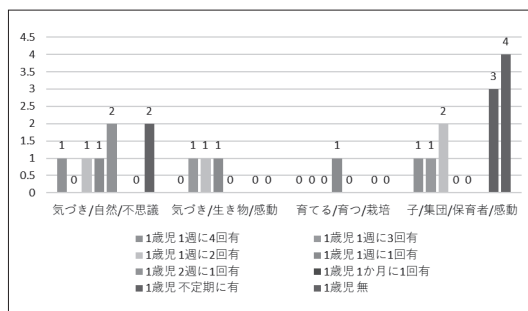


図2. 1歳児の気づきと園外遊びの回数

ぱーい。』『大事、大事』』と話して、大切そうにどんぐりを持ち帰ったようである。ここでは、大小などの2つの世界を表現して1歳児の特徴を見せている。C児は、散歩の途中を通りかかった家の犬を見て『「あ、わんわん」「ばいばーい。』』と話し、帰りに同じ家の前を通ると『「あれ? わんわんいない…」「お散歩行ったのかな。〇〇と一緒に』』と自分の気持ちを犬に同化させて話している。

2歳児について (図3)

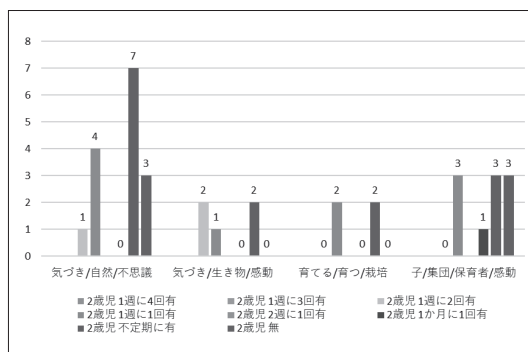


図3. 2歳児の気づきと園外遊びの回数

2歳児の気づきの内容は、項目1の気づき／自然／不思議は15事例、項目2の気づき／生き物／感動は5事例、項目3の育てる／育つ／栽培は4事例、項目4の子／集団／保育者／感動は10事例だった。気づきの場は、園外遊び5事例、園庭12事例、保育室16事例（テラス1事例含む）、菜園1事例だった。週2回園外遊び有は、2事例だっ

た。D児は「このわたげは、たんぼぼの赤ちゃんなの？だって、わたげを飛ばしたらたんぼぼの花が咲くでしょう」と話し、わたげ・たんぼぼ・花と植物の成長をイメージして、その成長を理解するような推論による表現をしている。E児は、散歩の途中で『「あ！かたつむりある！」と話し、その1週間後の散歩では「先生、かたつむりまだいるのかなあ』と記憶をたどって話している。週1回園外遊び有のF児は、散歩の途中で「雲うごいてるなあ」「太陽さんなくなったなあ」と話している。不定期に遊び有は2事例だった。G児は「アリさんお散歩してる」、H児は、桜並木の葉が落ちているのを見て「木が泣いてるみたいやな」とアニミズムの表現で言語化している。

3 歳児について (図4)

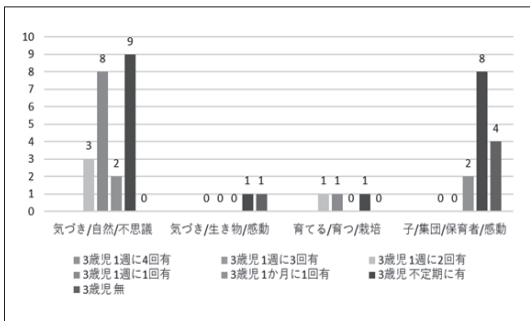


図4. 3歳児の気づきと園外遊びの回数

3歳児の気づきの内容は、項目1の気づき/自然/不思議が22事例、項目2の気づき/生き物/感動は2事例、項目3の育てる/育つ/栽培は3事例、項目4の子/集団/保育者/感動は14事例だった。気づきの場合は、園外遊び1事例、園庭23事例、保育室16事例、菜園1事例だった。園外遊びでの1事例は「不定期に有」で、気づきの内容は「なんか降ってるで〜」「あ！雪みたい」「白いから雪やで」「氷みたいやな」「空から氷降ってきた〜」だった。

3歳児は、日常生活に必要な言語を獲得し、「なぜ」「どうして」の疑問を他者に向けて表現するようになる。ここでの事例は、その疑問を3歳

児なりに自分への問いとして自分自身へ語りかけ、答えていると考えられる場面である。

4 歳児について (図5)

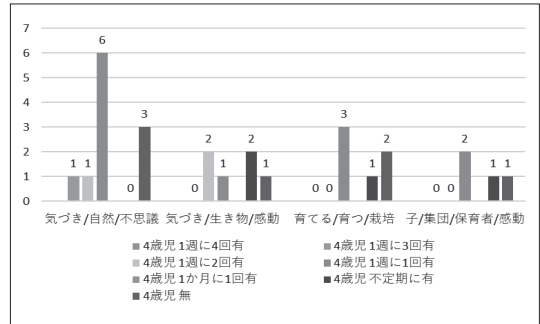


図5. 4歳児の気づきと園外遊びの回数

4歳児の気づきの内容は、項目1の気づき/自然/不思議は11事例、項目2の気づき/生き物/感動は6事例、項目3の育てる/育つ/栽培は6事例、項目4の子/集団/保育者/感動は4事例だった。気づきの場合は、園外遊び2事例、園庭17事例、保育室8事例だった。園外遊び週3回有のI児は、「これ知ってるで、ぺんぺん草やろ」「草も食べれるん？」だった。園外遊び不定期に有のJ児は、「虫がいた！」「キリギリス」「でも動かへん」「おなかすいたんちゃう？緑の葉っぱないし」「あっクローバーのところに逃してあげよ！」だった。

4歳児はコミュニケーション能力が発達してくるが、一方で疑問に感じたことについて、推論を科学的に観察して結論に導き、言語表現するまでには至っていない。あくまで、友達との対話を楽しんでいる事例である。

5 歳児について (図6)

5歳児の気づきの内容は、項目1の気づき/自然/不思議は11事例、項目2の気づき/生き物/感動は4事例、項目3の育てる/育つ/栽培は5事例、項目4の子/集団/保育者/感動は14事例だった。全体の気づきの場合は、園外遊び2事例、園庭12事例、保育室17事例、菜園3事例だった。

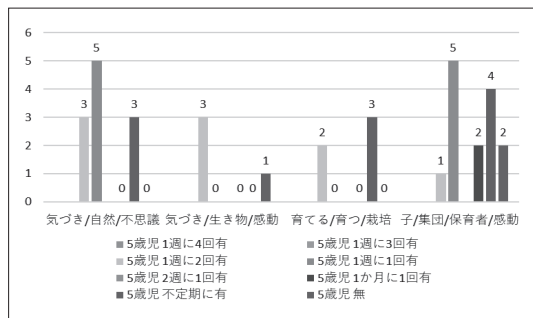


図6. 5歳児の気づきと園外遊びの回数

園外遊び週2回有の事例では、日頃から虫図鑑が大好きで眺めていた子どもたちが、田んぼを覗いていると卵がいっぱいあるのを見つけて「これつぶつぶ何?」「これってオタマジャクシの卵!ほんで見た」と話す集団の姿である。ここでは、K児の疑問を他の子どもが答えている。そして、本で得た知識を媒体として、確信に満ちた言葉で集団を導いているようにも見える。就学をひかえた5歳児らしい姿が感じられる場面である。一方で次の事例は、想像性を駆使しながら対話を遊びとして、楽しんでいる。週1回園外遊び有で、空を見上げ雲を見つけて「あの雲おいしそうやな」「アイスみたい」「コーンついてるやつ」「あっちはわたがし」「あー、でもかたちかわっちゃった!」「くっついた」である。5歳児前半の姿として推測できる。

(4) 園外遊び「無」の事例から見る4項目と年齢による検討

ここでは、4項目と園外遊び「無」の回答に基づき園外遊び「無」の事例から年齢毎に検討を行う。

0歳児について (図7)

項目1の気づき/自然/不思議は2事例が園外遊び「無」であった。事例の内容は、『雪を見て「きれー」と言う。雪だるまに興奮する』『雨が降っているのに気づき「あめ」と指さしながらつぶやく』だった。項目4の子/集団/保育者/感動は

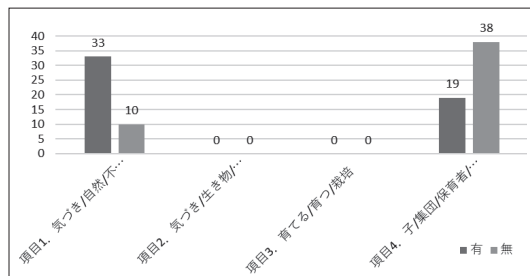


図7. 0歳児の園外遊び「無」と気づき (単位: %)

8事例が「無」であった。事例の内容は『給食の挨拶の時、保育者「いただきます」子どもたちが「いただきます」子ども「どうぞ」と可愛らしい声で言ってくれました』『片付けの際、落ちているおもちゃを見つける(子ども目線で)「あった」「ないない』『首を横に振る「いあん(イラン)」その姿を見た子が食材をスプーンに乗せて「どうぞ(どうぞ)」大きな口を開けて「おいしー」など、保育者は子どもが話す一語文の気づきに感動していた。0歳児の園外遊び「無」は、保育者の保育する喜びや子どもの仲間関係から生まれる共感であることの記述が特徴として見られた。項目2と項目3は記載「無」であった。

1歳児について (図8)

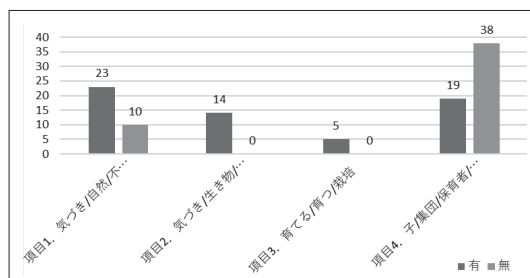


図8. 1歳児の園外遊び「無」と気づき (単位: %)

項目1の気づき/自然/不思議は2事例で、内容は『雪を見た子どもたち「うわー」「あー」「雨ちゃう」窓から手を出し雪を触ろうとする「冷たい」風にふかれて髪の毛についた雪を不思議そうに見る』『外で降っている雪を見ていて、保育者が外に手を伸ばし雪をつかまえた。その後、

手を見て「ないなあ」「あれえ？」と言った』だった。項目4の子／集団／保育者／感動の無は4事例であり「あ！見て！ここにもぞうさんいるでー（絵本）」『持っているボールを見せ「一緒」と着ていた服とボールを見せる』『ままごと遊びの際「はいどうぞ」「ありがとう」の言葉のやりとりを喜んでしている。また、お母さんになりきり人形に話しかけたり、お世話をしたりしてお母さんになりきって遊んでいる』『給食時に「順番に食べてくださいね」と子どもが友だちに言っていた。』などが話された。項目2と項目3に関しては園外遊び「無」の記載はなかった。

1歳児は園外遊び「無」であっても、室内から外を眺めて感動する日常生活における様子が事例を通して伝わってくる。

2歳児について（図9）

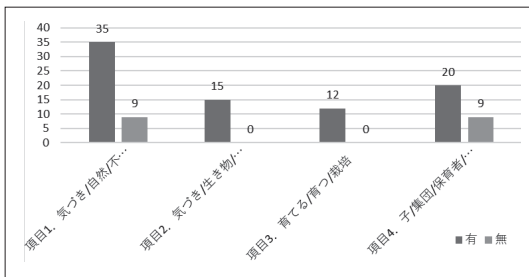


図9. 2歳児の園外遊び「無」と気づき（単位：%）

項目1の気づき／自然／不思議での「無」は3事例で、『部屋を換気中「風が散歩してる！」』『雷で大雨が降っているのを見て「雷さん泣いているのかな？」「びっくりしたのかな？」』『「お水こおっちゃったけど、お日様出てきたら溶けちゃった」「あったかいと溶けちゃうのかな？」』だった。項目4の子／集団／保育者／感動の「無」は3事例であり『給食の時カレーうどんの献立でちくわを半分に切ってあるのを見て「ちくわトンネルみたいや」』『10月ごろA君の母から「夕食後おやつが食べたくて「それでもお腹がペコペコ」と伝えた」と聞く』『着脱の時服を畳んでいるとなかなか難しくいる子を見て「一緒にしようか、

手伝ってあげる」と言い「手伝って」と2人で畳んでいた』があった。項目2と項目3に関しては、園外遊び「無」の記載はなかった。

3歳児について（図10）

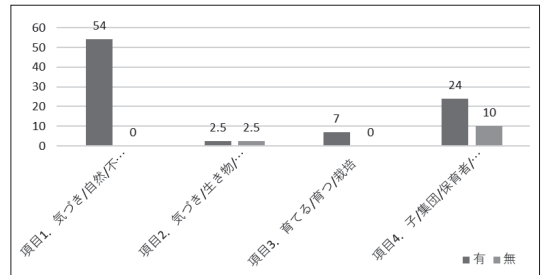


図10. 3歳児の園外遊び「無」と気づき（単位：%）

項目2の気づき／生き物／感動において「無」が1事例あった。内容は、『虫探しをしていてなかなか見つけられず「虫さん寝てるのかな」「お出かけしてるのかな」と子ども同士話していた』だった。項目4の子／集団／保育者／感動の無は4事例で、『泣いている子を見つけて「どうしたの？」と優しく聞いていた』『砂場で山を作っている時黒い砂が固まるけど白い砂が固まらないよ。』『風船はどうして落ちてくるのかな？』『「わあ～めっちゃおいしそう！」「これおいしいで、食べてみ？」「おちゃわん持たなこぼれるで』』だった。項目1と項目3に関しては、園外遊びに「無」の記載はなかった。

4歳児について（図11）

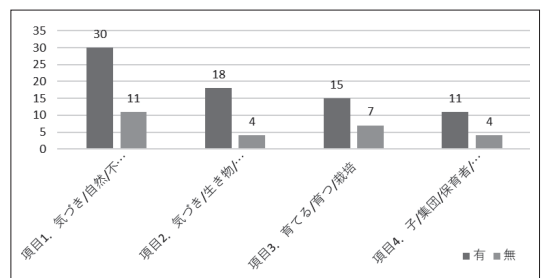


図11. 4歳児の園外遊び「無」と気づき（単位：%）

項目1の気づき／自然／不思議「無」は3事例

で『「こどもの日の集いでかけっこをしていて、他のクラスが走っているのを応援していると風が強く吹き、こいのぼりが音を立ててゆれる。それを見て「こいのぼりさんも応援してるみたいやな」と言う。』『水ができたのを観察していて簡単にわかれた時「どうして氷は割れるの？」と不思議にしていた。』『子供たちが水道の水が凍っているのを見つけて「今日は冷凍庫みたいに寒いのかな』だった。項目2の気づき／生き物／感動で「無」は1事例で『「これ何?」「へえー」「ちょうちょうの虫でくるかな」次の日「まだ生まれてないな〜」毎日見に行く』だった。項目3の育てる／育つ／栽培無は2事例で『「チューリップの芽が出ていることに気づき「土からチューリップ出てきた」「早く咲いて欲しいな。大きくなってね』』『「チューリップの球根が土の上のほうに飛び出していた。「チューリップ出てきてる。寒いで、土の中に入れといたろ」「まだ冬ですよ』』だった。項目4の子／集団／保育者／感動の「無」は1事例で「お誕生日おめでとう!!」「にんじんのケーキ!!」だった。

5歳児について (図12)

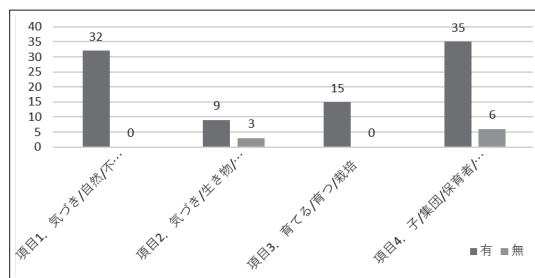


図12. 5歳児の園外遊び「無」と気づき (単位: %)

項目2の気づき／生き物／感動で「無」は1事例で『「先生! さなぎがちょうちょうになってる!」「飛ばしてあげる?」「うん! みんなよんでくる!』とあり、子／集団／保育者／感動は、2事例で『K「見て、〇〇ちゃんの絵かわいい」M「ほんまや!すごい」K「うん!」紹介し合う』だった。項目4の子／集団／保育者／感動「無」は1

事例で『保育士目をじっくり見て「先生の目に僕がうつってる』』だった。項目1と項目3に関しては、園外遊び「無」の記載はなかった。

VI. 総合考察

園外遊びでは、自然に触れる環境での遊びと自然に触れにくい環境での遊びの間で自然に触れる環境での遊びが有意であった。

園庭では、自然を対象とする遊びと遊具などの遊びでは、遊具などでの遊びが有意であった。それは、園庭遊びは、自然と触れ合う機会が少ないことを意味している。一方で遊具などで活発に遊ぶ様子がうかがえた。

気づきの分類としての4項目における園外遊びの実施回数と遊びの内容は、質問紙調査の実施時期が2月であったため、園外遊び実施の回数は子どもの気づきの内容と必ずしも一致するものではなかった。また、特に園外遊びの機会がなかったのは0歳児で、その気づきは、言葉での表現ではなく、表情で表現している。保育者は、子どもの表情から想いをくみ取り、共感する姿もあったが、園外遊びの機会については、今後の課題が残されている。0歳児の時期から子どもを園外で遊ぶ機会を作ることで、感性の育ちは、その後の気づきや言語表現を豊かにしていくのではないかと考えられた。

自然への気づきは2歳から3歳頃に増えており、気づきを言語化して、保育者や友達との関係の中で共感し、感性を豊かに育むことにつながることで示唆された。そのことから、自然環境に目を向ける年齢の特徴は、2歳児頃から変化が見られ、3歳児以上の幼児になると自然への気づきが増え、4歳児頃には自然の不思議さを自分なりに捉えて見たことや体験した事実をその通りに伝え、会話を楽しむ姿があった。5歳児では、「なぜ」の疑問について図鑑や絵本から得た知識について友達と共感しながら、解決に向かおうとする対話に特徴があり、論理的に捉えようとする姿があった。

自然環境における子どもの姿からは、無藤が述

べている「子ども主体の『自分なりの表現と意味の発見』」は、理解できるが、本研究では次の課題をとしたい。また、難波が述べている「理性的認識は能動的であるが、感性的認識は受動的である」は、受動的という表現が本研究では見い出せなかった。しかし、その後述べている「価値あるものに気づく感覚」については、子どもの心の響きとして、研究では計り知れない奥深い感性の意味が読み取れた。それは子どもの姿からもうかがうことができた。

本研究では、園外での遊びが、より自然に向き合う機会となり、感性を育む保育としてふさわしいのではないかと考えられた。しかし、子どもの発達には、園外であれ園庭であれ、子どもが自ら関わろうとする環境の存在があれば、どの遊びも大切であると言えよう。そして、保育や家庭教育においても、子どもが自然に目を向けることのできる環境は、人格形成の上でも必要とされる。

近年、子どもがのびのびと遊ぶ場が減少した現状もあり、遊び環境や感性の育ちについて、保育の関連施設及び自治体や地域そして家庭が連携して検討することが、望まれる。

(参考・引用文献)

- 1) 〈平成30年施行〉「保育所保育指針 幼稚園教育要領 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 解説とポイント」汐見稔幸(監修) 無藤隆(監修) ミネルヴァ書房 2018
- 2) 難波正明「領域『表現』の意義と可能性に関する一考察」京都女子大学教職支援センター研究紀要、No.002 pp15-29 2020
- 3) 無藤隆／古賀松香編「社会情動的スキルを育む『保育内容 人間関係』」北大路書房2016
- 4) 無藤隆「自ら学ぶ子を育てる」金子書房1998
- 5) 塚本敏浩／廣田邦子「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿『豊かな感性と表現』をとらえた研究」教育保育研究紀要6 pp49-57 2020
- 6) 平嶋一臣「『感性』育てへの試案」純真紀要

No.60 pp1-14 2020

- 7) 大橋喜美子「子どもの感性と意欲を育てる保育環境についての研究—0～5歳児の発達の基盤に着目して—」家庭教育研究25 pp23-33 2020
- 8) 「個を大切にするデンマークの保育」青江知子／大野陸子ビャーソーウー山陽新聞出版センター2010
- 9) 大橋喜美子「保育の専門性と保育者の自己肯定感に関する研究—保育者と養育者の質問紙調査からの一考察—」大阪総合保育大学児童保育論集第2号 pp49-58 2020
- 10) 岩波国語辞典第八版 岩波書店 2019
- 11) 特選版日本国語大辞典 2 さーの 小学館 2006
- 12) 特選版日本国語大辞典 1 あーこ 小学館 2006

付 記

本研究の一部は、日本家庭教育学会第37回大会において発表している。

謝 辞

本論文を作成するにあたり、ご指導いただきました立命館大学大学院 竹内謙彰教授、並びに質問紙調査にご協力くださいましたA県B市の保育関係の皆様と、分析に必要な4項目作成にあたり、ご協力くださいました大阪総合保育大学 稲垣由香里講師に心より感謝申し上げます。